



オ二の一年



環境科学部長／環境科学研究科長

村上 修一

海外での新型コロナウイルス発生の報道で目にした顕微鏡の写真、王冠の突起が何となく鬼の角に似ていると思った2020年の初頭、その後はまさに鬼のような1年となってしまった。本稿を書いている2021年3月末現在の状況は、ある意味1年前とあまり変わらない。事態はどのように推移することになるのか、今後の状況は見通せないものの、この1年間に何が起きたのか、記憶の新鮮なうちに記しておくことは意味があるのではと思い、この巻頭言の場をお借りすることとした。国内外、および本学における主な動向を下表のようにまとめてみた。

表1. 新型コロナウイルス感染症関連の動向

年	月	国内外の主な動向	本学の主な動向
2020	1	厚労省 海外での発生第1報 国内感染者第1例	海外渡航, 感染予防の注意喚起
	2	ダイヤモンド・プリンセス号集団感染 厚労省 対応方針発表	行事等の変更, 延期, 中止の発表
	3	全国小中高校等一斉休校 (最長3ヶ月) WHOパンデミック宣言 特別措置法改正 東京オリンピック, パラリンピック延期決定	感染予防の注意喚起, 罹患した場合の対応の発表 学位記授与式中止 (一部学部のみ交付式実施)
	4	国の緊急事態宣言 (1回目, ~5月) 国内第一波ピーク	入学式中止, 授業開始の延期 図書情報センター休館 (~7月)
	5	厚労省 新しい生活様式の発表	前期授業開始 (遠隔) 学生支援制度の告知
	6	文科省 コロナ対応入試ガイドライン	PCとルーターの貸出開始
	7		対面授業 (~9月)
	8	国内第二波ピーク 文科大臣の差別偏見防止メッセージ	オープンキャンパス (オンライン)
	9		Teams研修会 後期授業開始 (対面)
	10	Go To 事業 (~12月)	
	11		湖風祭 (オンライン)
	12		特別選抜試験
2021	1	国の緊急事態宣言 (2回目, ~3月) 世界の感染者1億人超える 国内第三波ピーク	活動レベル引き上げ授業遠隔に 大学入学共通テスト
	2	国内のワクチン接種開始	個別学力試験(前期日程)
	3	国内第四波?	学内ネットワーク整備工事完了 個別学力試験(後期日程) 学位記授与式 (代表者のみ参列)

国内外の動向には初見の項目が並び、本学の動向には中止、延期、遠隔といった文字が並び、鬼のような1年であったことがにじみ出ている。あのことが挙がっていないではないか、とか、このことの影響や経緯を深掘りしないと記録としては意味が無い、など、異論を持たれた方もおられるだろう。この表には、埋められるべき行間の余地が確かに多い。それらの余地に思いをめぐらせることで、この1年間の記憶を呼び起こし、一連の動向について検証を行う契機となれば幸いである。

学部全体を俯瞰すべき立場にしながら、このような話題で恐縮なことではあるが、研究室の学生とともに、まちづくり都市デザイン競技というものに応募するようになり、今年で3年目になる。今回は岡山市の旧城下町地区が対象であった。岡山と言えば桃太郎。岡山駅前には、イヌ、サル、キジを引き連れた立派な銅像が立っている。作品のコンセプトをめぐって話し合った際、案の定、桃太郎が話題に出た。そこで一人の学生がこんなことを言い出した。「一方的に悪者にされて、鬼がかわいそう。」なるほど、確かにそうか。また、学生からはこんなコメントも。「鬼にも一人一人(?)、背負ってきた物語がある、切ないよ。」。。。こちらは、国内映画興行収入の最高記録を今季更新し、社会現象ともなった、あの作品のことを言っているようだ。鬼に対する優しさ、これは今の精神性の現れなのだろうか。

作品のコンセプトづくりの参考にしようと、鬼に関する文献資料を検索したところ、歴史学や民俗学の分野では、鬼についての研究や論考が相当数存在することがわかった。中でも、学生による先の発言に通じる「オニの両義性¹」というキーワードが興味深い。通常、鬼は災いをもたらす存在と思われがちだが、地域によっては福をもたらす存在として、信仰の対象となっているらしい。

両義性。環境科学を生業とする我々にとっては、なじみのある概念ではないか。自然現象は、災いにもなるし、福にもなる。以前、琵琶湖沿岸にお住いの古老に聞き取りを行った際、水害でたくさんの魚が湖岸にうち上がったので拾い集めたというエピソードが楽しそうに語られ驚いた。また、足しげく通っていた吉野川（日本三大暴れ川のうち四国三郎）では、氾濫によって沿川の土が肥え、藍作が盛んであった、という話を聞いた。先人たちは、命や暮らしを脅かす自然現象の大きな力をいなしながら、たくましくもその果実を享受してきたのであろう。

ひるがえって今日の私たちはどうか。この大禍の果実は何なのか。テレワークの普及、お父さんの復権、自分時間の充実、巣籠消費による売上げの増加、新たな取り組みの創出、など、人によって様々のようだ。世の中には、〇〇がこう変わるポスト・コロナ、という論考があふれている。かく言う私も、昨年、今年と、この大禍の中、卒業生（および同世代の家族）を社会に送り出す際にこう声をかけた。チャンスだ、いい時代が来る、と。ただし、その果実が何なのか、自分でもまだわからないまま、そう声をかけたことについて、自責の念に駆られている。

いや、心配は無用だろう。1990年代後半以降のいわゆるZ世代、自己を表現することに長け、柔軟で創造性がある。きっと次世代には、上流から大きな果実がどんぶらこ、どんぶらここと流れてくるであろう。

1. 例えば民俗学者の高田照世氏は「オニを語る①～民俗学編～」という講演でこのキーワードを使われている。帝塚山大学 教員紹介データベース：http://www.tezukayama-uac.jp/teacher/gyoseki/918202_990105_29.html：2021年3月31日閲覧